



亀谷 昶 著

『農業における投資・財政・
金融の基本問題』

大著である。全体で約500ページあり、農業を巡る資金の問題に関してあらゆる角度から論じている。亀谷氏のこれまでの研究の集大成であるということができ、「あとがき」によると、執筆に10年余の歳月を要し、「自分のために、自分自身を納得させるために書いた」ということであるが、読者は本書を読むことにより著者の整理の過程を追体験することができ、農業の資金問題について全体像をつかむことができる。

本書の最も大きな特色は、一人の著者によって農業投資、農業財政、農業金融、農協金融が一つの本の中で体系的に論じられていることであろう。本書を読んでよくわかるように、これらは相互に密接不可分の関係にあり体系的に理解する必要があるが、これまでは、それぞれの分野ごとの専門家によって別々に論じられることが多かった。

また、本書は副タイトルとして「理論と検証」とあるように、最新の理論を紹介するとともに日本農業の具体的なデータを多く盛り込んでいることも大きな特色であり、読者が理論を現実と結びつけながら理解できるよう工夫されている。

本書の内容を章に沿って紹介すると、第1章「農家金融・農業経営金融の経済理論」では、農家・農業経営というミクロの

視点から、その金融行動、金融機能について金融理論、農業経営学、農業会計学の研究成果を踏まえ論じている。具体的には、農業経営の資金調達、最適資本調達、資産選択行動、農業経営成長についての理論を紹介するとともに、統計データに基づいて日本の農業経営のレバレッジ比率、負債比率等の分析を行っている。

第2章「農業投資と危険性・負債問題」では、農業投資に伴う危険性（リスク）、不確実性と経営意思決定についての理論を紹介し、農業経営のリスク対応と農業経営負債問題について論じている。また、1980年代のアメリカの農業負債・農業金融危機問題についても簡単に解説している。

第3章「農業資本形成の動因と水準」はマクロ的な分析であり、「農業・食料関連産業の経済計算」のデータを使って戦後の農業投資の性格を示すとともに、農業資本形成に果たした財政・金融の役割について制度資金を中心に説明している。「農業・食料関連産業の経済計算」のデータを時系列に並べるだけでもかなりのことが解明できることを本章で教えられた。

第4章「農業財政と農業公共投資」では、農業投資に果たす農業財政の役割を論じており、財政の意義を公共経済学の理論に基づいて整理したあと、農業基盤整備（農業公共投資）が正当化される理由について、外部経済効果、地代節約効果、食料安全保障という観点から論じている。さらに、過大な公共投資が国債の累増や環境破壊をもたらしたとし、21世紀の農業公共投資の改革課題として、公共投資の評価制度、情報公開、効率

化,民営化,公共投資水準の適正化をあげている。

第5章「農業政策金融の機能と効果」では,農林漁業金融公庫,農業近代化資金等の制度資金について,その機能と効果を論じており,農業政策金融が必要な理由として,金融市場における信用割当への制度補完的対応,農業生産の低効率性への市場補完的対応,農業インフラの整備・発展的農業経営の育成などの政策誘導的対応,の三つをあげている。さらに,農業政策金融の現状を概観するとともに,農業基盤整備資金(農林公庫資金),農業近代化資金,スーパー総合資金制度について,その意義と役割を検討し,最後に,近年の財投改革論議も踏まえて農業政策金融の改革課題を提言している。

第6章「JA金融の枠組・変容と改革」では,最初に農協信用事業の存在理由,機能について説明したあと,JA金融の展開過程と現状についてデータに基づいて解説している。著者は,JA金融は,現在,大正末期の産業組合中央金庫の設立,昭和初期の金融・農業恐慌による農村産業組合の信用不安,戦後の新しい農協制度の成立に伴う農協系統信用事業のスタート,に比肩すべき「歴史的転換期」に立っているとしており,その問題領域を,金融自由化・金融システム改革への対応,JA合併・系統組織再編,の二つに整理している。そして,JA金融の改革方向として,JA単協金融の独立事業化・金融総合センター化,JA系統金融の新システム構築と機能分担化,JA系統金融の協同性と市場競争力の確保,

JA系統金融の経営健全化とセーフティーネット化,の四つをあげている。

亀谷氏は,第6章の最後のほうでJA金融の今後のあり方として次のように書いているが,同感である。

「今後とも地域性や情報の非対称性によって,リテール金融分野として農村・地域的金融市場をセグメントしていくことが可能である。……市場型金融システム下でも,業務目的や業態を異にする金融機関の併存と競争は可能であり,協同組合金融機関の存立とサバイバルは可能である。そして,その実現のためには,協同性の社会的理解と市場競争力を高めることが不可欠である。この見方の基底には「協同組織金融の原理と市場型金融の原理との併存を可能にする社会経済的な仕組・制度の形成」の問題が横たわっていることを認識しておきたい。金融自由化・金融システム改革の第一段階では,各金融機関や業態間の同質化が進むが,第二段階に入ると,各金融機関が特性を発揮するようになり個性化が始まるとみられる。JA金融は協同組織金融としての高い志をもって,その個性的なシステムと運営体制を創出しなければならない。」

本書は,大著であるためすべてを読み通すのはなかなか難しいと思われるが,様々な問題に直面した時に事典的に使うこともできるし,問題に対する分析手法を学ぶこともできる。久方ぶりに出た農業金融の貴重な文献であるということができよう。

養賢堂 2002年1月

7,000円(税別) 495頁

(主任研究員 清水徹朗・しみずてつろう)